

館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

5月 1日 今日の通読箇所 エレミヤ書 22章1～9

「預言者の苦衷」

何か困った問題が生じて、牧師に相談にくる人がある。実は牧師も人間だから、簡単に人を助ける力はない。ただその人が、神様に結びついて、祈るならば、神様はその人を助けて下さる。これは間違いがない。そこでその困った具体的な問題を、一応棚にあげて、悔い改めと信仰によって神を信じ、受け入れ、祈るように勧める。実はこれが最も近道なのだが、なかなか分かってもらえない。それより具体的な問題の解決だけを期待するのだ。私はエレミヤではないが「悔い改めて神に立ち返ることを除いて、祝福を期待できない」と、繰り返し王様に語らねばならない彼の苦衷も、十分に察するのだ。

5月 2日 今日の通読箇所 エレミヤ書 22章13～19

「バブルの結末」

バブルの最中には、日本人も随分調子づいて贅沢をした。老人も小娘も怖いもの知らずだった。実はこれは正味のない泡だった。泡がはじけて、いま我々は正味に合った生活を強いられている。しかしあまり膨らみ過ぎたから、正味に戻るショックも大変だ。高速道路から出た車が普通の速度に戻るショックと似ている。イスラエルの王も、贅沢が自分の値打ちを上げたと思い込んでいた。先祖が、貧しい中に正義を行った功績も忘れていた。やがて神の裁きを受けて人々が嘆くとき、悲惨な自分の家族を悲しむ者はいても、王様のことなど、気の毒に思うものは一人もないだろう。エレミヤはそういう。

5月 3日 今日の通読箇所 エレミヤ書 23章1～8

「悪い牧者」

イスラエルの王や祭司は神に立てられた人民の牧者だ。しかし彼等は特権に甘んじ、贅沢三味な生活を楽しむだけで、人民を守り指導することをしない。人々がこの悪い指導者に見習って、偶像礼拝と不道德に陥っていても、その裁きが近づいても、王や祭司はその責任を感じないのだ。しかしやがて時がくると、神に立てられる真の牧者が現れるだろう。そのとき人々はこの牧者のもとで、安んじて祝福の生活を送ることができるだろう。この預言はキリストにおいて成就した。主はいいたもう。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは、羊のために命を捨てる」と。

5月 4日 今日の通読箇所 エレミヤ書 23章9～15

「大事故」

暗闇の道がある。おまけにその道はすべる。あとから群集が無理やりに押すので、雪崩を打って人が倒れ、その道に折り重なって死ぬ。そういう悲惨な事故がある。イスラエルの指導者である祭司、預言者、それに一般民衆は、まるで事故のような、恐ろしい罪と滅亡に落ち込もうとしている。エレミヤは幻のように、その恐ろしくも悲しい場面を見るのだ。恐怖のためにエレミヤの心臓は破れ、骨々は震える。酔っぱらった人が正座できないように、彼はふらふらになっている。聖なる神の言葉と人々の罪と無関心の間にいて。

5月 5日 今日の通読箇所 エレミヤ書 23章16～22

「にせ預言者」

にせ預言者たちは、自分の主観や、また人の気持ちにおもねって、適当な言葉を語っていた。主の言葉を軽んずる者に向かっても、忠告することなく、「あなたがたは平安を得る」と言い、強情に自分勝手な生活を送り、神に従わないものにも「あなたに災いは来ない」と、調子のいいことを言うのだ。彼等は神に遣わされもせず、神の示しも受けていない。神は彼等の言葉に責任をお取りにならない。それゆえ「彼等に聴いてはならない」と言われる。誤った案内人は、誤ったところに人を導く。盲人が盲人の手引きをすれば危険が見えず、ともに穴に落ちるのだ。

5月 6日 今日の通読箇所 エレミヤ書 23章23～32

「削岩機」

[26節]以下に「主の言葉」について教えられている。「誠実に語られた主の言葉は麦のようだ」それは人の魂の養いなのだ。しかし人の思いで語る場合は、栄養にならないこと藁のようだ。「主の言葉は火のようだ」。火は、寂しい、沈んだ心、無為憂鬱な生活を燃え上がらせる。彼は明るさと熱気を取り戻すのだ。み言葉はまた「岩を打ち砕く槌」のようだ。頑固な高慢な心も、誠実に語られる主の言葉によって、砕かれ謙遜にされ、やがて彼は信仰によって主を受け入れるのだ。まるで「削岩機」のようだ。そこに掘られた穴から、人格の根底に、神様の、恵みと力のダイナマイトが仕掛けられるのだ。

5月 7日 今日の通読箇所 エレミヤ書 24章1～10

「いちじく」

「果物」の語源は「腐す(くだす)もの」だが、おいしい果物は腐りやすい。バビロンとの敗戦の結果、多くの技術者その他が捕虜になって敵国に連れて行

かれた。しかしこの苦しい経験を通して彼等の中に強い悔い改めが生じ、後のイスラエル回復の萌芽となった。しかるに、捕囚を免れて本国に残った幸運なイスラエル人は、結局反省が足らず、バビロンに反抗を続けた結果、さらに過酷なその攻撃を受けて、徹底的な亡国を招くことになる。エレミヤはその両者を、まだ食べられるいちじくと、腐り果ててもう食べられない、いちじくとにたとえたのだ。

5月 8日 今日に通読箇所 エレミヤ書 25章1～14

「70年間」

エレミヤはすでに23年間預言を語った。しかしユダの王も国民もそのメッセージに従わなかった。それゆえ[8～14節]の宣告的メッセージを伝えなければならなかったのだ。しかし彼はここに「この地は70年の間、バビロンの王に仕える」という、有名な予言をも語った。これは、捕囚になったダニエルたちを励まし、さらに多くの「回復の予言」が現れ、結局、70年後には、クロス王によるイスラエル解放令、帰国許可となり、ユダが再び国を形成するまでに至るのである。エレミヤは本当に息の長い預言者だった。

5月 9日 今日に通読箇所 エレミヤ書 25章15～27

「裁きの杯」

神はエルサレムに対して「裁きと滅亡の杯」を飲ませる。そのエルサレムを攻撃するバビロンにも、強大なエジプトにも、その他の諸国にも、遅かれ早かれ同じ杯が突きつけられる。ここに神の裁きを「杯と酒」に例えたのは面白い。酔っぱらった人はただ威勢がいいばかりで、誘惑には勝てない、喧嘩はする。支離滅裂だ。あらゆる悪徳と危険にさらされながら、自分ではそれに気が付かない。酔っぱらいはみずから裁きと滅亡を買っているのだ。エレミヤは、贅沢と戦争に奔走する世界に向かって、このように警告するのだ。

5月10日 今日に通読箇所 エレミヤ書 26章1～15

「外道の逆恨み」

犯罪人が自分を逮捕した警官を恨むような場合を、昔から「外道(正しい道に外れた人)の逆恨み」と言う。エレミヤは神に遣わされて「今のままではあなた方は滅び、この神殿も、先に滅亡したシロの神殿のように荒廃するだろう。しかし今でも悔い改めれば神は許したもう」という恵みの言葉を語ったのだ。国の司、祭司、預言者などがこれを怒り、エレミヤを逮捕し、裁判にかけ、できたら殺してしまおうという、何と情けないことだろう。神の選民であるのに。これこそ「外道の逆恨み」もいいところだ。エレミヤは一切を神の手に委ね「私

の命はあなたがたの手中にある。好きにせよ」という。

5月11日 今日の通読箇所 エレミヤ書 26章16～24

「長期預言者」

当時の宗教家、祭司と預言者は、この際、エレミヤを殺してしまおうとしたが、一般人や、その代表者の司はこれに反対した。結局アヒカムが責任をもってエレミヤを助けたのだ。エレミヤは度々生命の危険に会いながら、その都度助けられた点でも不思議な預言者だ。エレミヤに関しては、長期にわたる奉仕を神は望まれたのだろう。ここに引用された、シマヤの子ウリヤなどは、わざわざエジプトまで捜索隊を出して殺されているのに。新約でも、兄のヤコブは12弟子中最初の殉教者となり、弟のヨハネは100才まで生き延びた。それもこれも、神のみ心だ。

5月12日 今日の通読箇所 エレミヤ書 27章1～11

「綱とくびき」

ユダが度重なる背きの罪のために戦争に負け、バビロンに捕虜として連れてゆかれるのは、もはや免れ得ないことだった。しかしにせ預言者たちは、神の保護と助けを言い立てて、バビロンに対する抵抗戦を呼びかけた。いかにも威勢のいい愛国的言動に見えるが、実は今は罪を悔い改めて、一時の神の裁きを受け入れるのが、みこころであり、更生につながる道だったのだ。エレミヤはそのことを悟らせようと、例の如く、実物教訓のため関係者に綱とくびきを送り、彼等を警告したのだ。

5月13日 今日の通読箇所 エレミヤ書 27章16～22

「神殿の器物」

神殿に置かれた礼拝用の器物は、イスラエルがその富を傾けて作成し献納した、彼等の宝物であるとともに、敬虔と愛国心の象徴だった。その大部分がバビロンによって略奪されたのは、残念至極なことだった。ある預言者は威勢良く「それらはすぐに返される」といい、エレミヤは「今は悔い改めて神の裁きを受け入れ、バビロンに恭順しなければならぬ。そうでないと、残された器物さえも、あらいざらいバビロンに持ってゆかれますぞ」と警告する。しかし同時に「イスラエルの悔い改めが認められ、神の裁きの期限が過ぎ去ったとき、これらの器は再びエルサレムに返されるだろう」と教えた。

5月14日 今日の通読箇所 エレミヤ書 28章1～10

「象徴のくびき」

真の神の示しを求めず、ただ大勢の喜ぶ威勢のいい予言をし、かえって人々に道を誤らせる預言者の中で、ハナニヤは親分格の人物だった。はしなくも今、神殿でエレミヤとハナニヤの論争対決となった。この頃エレミヤは警告の象徴の「くびき」を、自分の首にかけてたまま生活していた。これも無言の説教だったのだ。ハナニヤは「バビロンのくびき」からの解放を華々しく語ったあと、エレミヤの首から「くびき」を奪い取って人々の前で砕いた。民衆は歓声をあげて喜んだかも知れない。しかしエレミヤは黙々と立ち去った。

5月15日 今日の通読箇所 エレミヤ書 29章1～14

「平安と希望」

罪を犯して神の罰を受けた場合、これも絶望ではないことを信じなければならない。真実に悔い改めて、甘んじて主の罰に服し、主の憐れみによる許しと回復を信じ待ち望むことが必要だ。エレミヤがバビロンに捕囚になったイスラエル人に求めたのも、この態度だった。「焦らずに、当分は捕囚の地に安住し、忍耐をもって主の許しと解放を待ち望め」と。かくて有名な「七十年後の解放」の予言が語られる。そして、よしんば主が時に人の罪を裁きたもうにせよ、その真意は「わざわざを与えるのではなく、彼に、平安、将来、希望を与えるにある」と告げるのだ。

5月16日 今日の通読箇所 エレミヤ書 29章15～28

「言論の混乱」

バビロンの攻撃と略奪は何回も行われ、その度にイスラエル人は捕囚となった。また捕囚を免れて本国に残される者もいた。さてエレミヤはと言うと彼は最後まで本国に残されたのだ。それは平素の言動から、彼がバビロン人から「親バビロン派」と見なされたからだが、ここにも思いもよらない彼の悲劇があった。さて捕囚地バビロンにも本国にも、多くの預言者がいて、ほとんどが、愛国的、激励的な予言をして、人心を振起しようとする。エレミヤは相変わらず、バビロン恭順を勧める。これに対する反発も激しく、まさに、言論の混乱と言わざるを得ない。

5月17日 今日の通読箇所 エレミヤ書 30章1～11

「記録預言者」

ここに「わたしがあなたに語った言葉を、ことごとく書物にしるしなさい」とある。昔の預言者、エリヤ、エリシャなどは、こういう命令を受けなかった。

彼等は主としてその時代の人々に向かってメッセージを語ったのだ。しかしイザヤ、エレミヤの時代には、メッセージを聞く人々が頑固で、彼等の裁きと滅亡は確実となりつつあった。それゆえ、彼等後期預言者のメッセージは、書き残してはるか後代の人に読まれ、その確実性が証されることを期待しなければならなかった。彼等を区別して「記録預言者」などと呼ぶが、彼等はつらい奉仕を命じられたのだ。

5月18日 今日に通読箇所 エレミヤ書 30章12～20

「いやし包む」

[12～15節]には、罪のために神の祝福と保護を失ったイスラエルの、国は滅び、外国の捕囚になって、異邦人の虐待と嘲笑にさらされている様子が、瀕死の病人のようなあわれな形容で記されている。しかしかくもイスラエルをしいたげた異邦諸国は、いつまでも安泰であろうか。いや、思い上がった彼等にも裁きの日がくる。彼等の裁きの日はイスラエルの回復の日だ。[16～20節]にそのことが記してある。これもまた神の約束なのだ。ホセアも言う。「さあわたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、わたしたちを撃たれたが、また包んでくださるからだ」

5月19日 今日に通読箇所 箴言 26章1～16

「三年寝太郎」

日本の昔話に「三年寝太郎」があり、ロシアにもオブローモフのように小気味のよい怠け者を書いた作品もある。[13～16節]にある怠け者なども、働きすぎの日本人にはかえって愉快に感ずるかもしれない。彼は「道に獅子がいるかもしれない」などと、ずるけの口実にかくみで「あの、知恵があってもどんどん解決する定評のある七人よりも、本当はおれの方が利口なのだ」などとうそぶいたり、なかなかみごとな怠けぶりだ。いかがですか。

5月20日 今日に通読箇所 箴言 26章17～28

「ゴシップ好き」

「たきぎがなければ火は消える。人のよしあしを言うものがなければ争いはやむ」[20節]

人間のゴシップ好きは昔も今も変わらないようだ。多少の事実があってもゴシップ好きが取り上げなければ、焚木の燃え尽きた火のようにすぐ消滅するのに、ゴシップ好きが繰り返し蒸し返し噂をすると、その影響の方が事実以上に害毒を流す結果になる。問題そのものよりも、ゴシップ好きのおしゃべりの方が罪が重いケースは、いくらもあるのだ。まして火もないところに想像で煙を立て

るなどは最悪だ。

5月21日 今日の通読箇所 箴言 27章1～11

「怒りと嫉み」

クリスチャンの社長「今晚教会で聖書のお話がありますが、いかがですか」 その秘書「私には信仰は必要ないのです」「でもイエス様は、わたしたちの罪のために死んでくださったのですよ」「でもわたしには別に罪はありませんから」「あなたは嫉妬についてどう思いますか」「はい、嫉妬のために陰口をきいたり、人を陥れたり、人を殺すことさえあるから、良くないですね」「あなたは嫉妬をしたことがありますか」「それは私だって女だから嫉妬ぐらいしますわ」「一日一回ぐらいかな」「そうですね」「そうすると、一年で365回、20年で7300回ですよ」秘書はしばらく黙っている。やがて「社長さん、実は私は特別に嫉妬心の強い女なのです。本当は毎日それで苦しんでいるのです。ぜひ今晚の集会に連れて行ってください」「憤りはむごく、怒りは激しい。しかし、嫉みの前には誰が立ちえよう」[4節]

5月22日 今日の通読箇所 箴言 27章12～27

「時と場合」

聖書学校を卒業したばかりの学生が宣教師の助手になって、その家に住むことになりました。朝早く起きて、寝床の中で大きな声でお祈りしていました。昔の聖書学校ではこれが熱心のシンボルでした。彼は後で宣教師に叱られました。「朝のお祈りは静かにするものですよ」「朝早く起きて大声にその隣人を祝すれば、かえってのろいとみなされよう」[14節] 事にも時と場合があります。

5月23日 今日の通読箇所 箴言28章1～12

「不安と平安」

「悪しき者は追う人もないのに逃げる」[1節]

警官が小石につまずいて2、3歩走ったら、前を歩いていた紳士が急に逃げ出したので、追いついて捕まえてみると逃走中の犯人だったという話がある。罪を持った者に平安はない。しかし、キリストを信じて罪を許された者は、生活や境遇の変化推移の中にも、常に天来の平安を持てるのはありがたい。

5月24日 今日の通読箇所 箴言28章13～28

「告白と許し」

「その罪を隠すものは栄えることがない。言い表してこれを離れるものはあわ

れみを受ける」[13 節]

罪は病気に似ている。体内にガンのような危険な病気が潜伏しているのにこれを放置しておく、それがだんだん体を弱らせて、最後には大変な結果になる。ガンよりも危険な罪を持ちながらそれを放置するのはもっと危ない。しかし悔い改めて神を見上げる者のために、赦し清める、神のあわれみが備えられているのだ。

5月25日 今日に通読箇所 箴言29章1～13

「悪い政府」

「正しい者が権力を得れば民は喜び、悪しき者が治めるとき民はうめき苦しむ」

[2 節]

ロマ書13章その他によれば、国家権力は国民の平和と秩序を守るために、神によって立てられたものだ。もちろん時にはドイツのヒトラーや、旧日本の軍国主義権力のような、神のみ心にも人心にも合わない権力が生じて、国民を困惑させることもあるが、それはまもなく滅亡して行く。しかし、今でもある地方では混乱や戦争が人々を悩ませている。我々は今の日本が比較的平和なのを感謝し、さらに良い政府、良い政治のため、さらに日本と世界のために、神に祈らなければならない。

5月26日 今日に通読箇所 箴言29章14～27

「忠義一途」

「治めるものの歡心を得ようとする人は多い。しかし人のことを定めるのは主による」[26 節]

有力者、支配者、あるいは社長、課長の歡心を得ようと躍起となり、酒を飲もう、遊びも付き合おう、賄賂も取り次ごうと、恥も外聞もなく勤めてみても、実際には当てが外れるようなケースも多い。人間の運命を決めるのは、決して有力者や社長などではなく実は神様なのだ。人間は利害関係などと共に気も変わる。一生を賭け尽くした会社がつぶれることもある。しかし「たとえわたしたちは不真実であっても、彼（神）は常に真実である」といわれる神に、われわれは信仰を献げつつ生きて行きたいものだ。

5月27日 今日に通読箇所 箴言30章1～17

「貧乏物語」

「わたしは二つのことをあなたに求めます。貧しくもなくまた富みもせず、ただなくてならぬ食物でわたしを養ってください」[7,8 節]

人間はあまりひどい寒さや暑さに耐えられぬように、ひどい貧乏にも山のように

な財産にも対応が難しい。私はある先輩から「牧師の貧乏は仕方がないが、貧乏臭くはなるな」と言われた。貧乏で卑屈にならないのは難しいからだろう。とともに、裕福でいながら、謙遜、清潔などの人格を守るのも難しい。使徒パウロは言う「わたしは富むことにも乏しいことにも処する秘訣を得た。わたしを強くして下さる方によって、何事でもすることができる」と。これもまた我々にとって大切な祈りだ。

5月28日 今日に通読箇所 箴言30章18～33

「四つの道」

「すなわち空を飛ぶはげたかの道、岩の上を這う蛇の道、海を走る船の道、男の女に逢う道がそれである」[19節]

これは「どんなところにも道はある。つまり方法がある」ということを示しているのだろうか。空にも岩にも海にも道はある。だから決して行き詰まったなどと失望することはないのだ。またその気になれば監督の厳しい男女の仲にさえ道はあり、しかもその足跡を隠す方法さえある。そんな危険な誘惑の道もどこに隠れているか分からないから、お互いに油断なく注意せねばならない。いつも「わたしは道である」とおっしゃったキリストに従って歩くのが、最も安全かつ祝福の道だ。

5月29日 今日に通読箇所 箴言31章1～9

「酒飲み王様」

「酒を飲むのは王のすることではない」[4節]

バスの運転手さんが酒を飲んでいては乗客の安全を守ることはできない。まして、飲んだくれで不行跡の王が国民の安全を守れるだろうか。酒は人を一時的な、軽い狂気、低能者にするのだ。しかしそれは酒だけではない。人を酔わせ迷わすものは他にもいくらでもある。サウル王は名誉欲と嫉妬心から、狂ったようになって、理由もなく若いダビデを追い回し、人望を失った。ところが後にダビデ王もまた、女性関係で失敗し、一家の家長として、また国王として指導力を失い、家庭と国の混乱を招いた。国王ならずとも責任のある大人は、よく注意して酒、過剰な名誉欲、異性の誘惑、こういう類のものを避けなければならない。

5月30日 今日に通読箇所 箴言31章10～31

「りっぱな奥さん」

これは理想的な奥さんの教科書だ。また独身の女性にとっては、すばらしい結婚準備のテキストだ。また独身男子にとっては、良い奥さんを見つける手引き

になる。それだけではない。もし教会がキリストの花嫁であるなら、この教えは教会のキリストに対する奉仕の標準を示している。一言で言えばキリストに対する愛と忠実の実行だ。また骨惜しみせずに労し、やがて多くの実を結ぶ生活だ。やがて主は彼女に言うだろう。「りっぱなことを成し遂げる女は多いけれども、あなたはすべての勝っている」[29節]と。

5月31日 今日に通読箇所 エレミヤ書 31章7～14

「喜びの帰還」

ここに記されたイスラエル人帰国回復の予言は、ペルシア王クロスの解放令の時ひとまず成就した。彼等はエズラたちに先導されて、喜び勇んで本国に帰還した。しかし第二次大戦後イスラエル共和国が建国し、ナチスなどの殺戮から生き延びたユダヤ人が、船で飛行機で徒歩で、全世界から喜々として集まってきた壮観は、その時代を知る者には忘れがたい出来事だった。しかしまだイスラエルの本当の回復は成就していない。多くの予言と同じく、これもその完全な成就是、キリスト再臨の日まで待たなければならないのだ。